

# 鳥学ニュース

No. 16

1985年4月1日

## 第19回 国際鳥学 会議について

国際鳥学会議は4年に1度開かれている。第19回会議は、1986年6月22～29日、カナダのオタワで開催される。そのプログラムが決った。

全体集会特別講演をはじめ、シンポジウムは50テーマ、一般講演、ポスター発表、ラウンド・テーブル討議、研究グループによる小集会、ワークショップ、映画、それに会議の前後にエクスカージョン16コースが計画されている。

論文要旨提出しめ切りは1985年9月30日、参加申込みしめ切り1986年1月31日である。

詳細な情報、最終サーキュラー、参加申込み書はつぎの宛先で申込みばよい：Dr. Henri Quillet, Secretary General, XIX Congressus Internationalis Ornithologicus, National Museum of Natural Sciences, Ottawa, Ontario K1A 0M8 Canada.

なお、この会議の前の6月15～21日に国際鳥類保護会議第19回世界会議が開かれる。

## 今秋 信州で 会いましょう

1985年度大会 予告

本年度の大会は、紅葉最盛期にあたる10月上旬に信州で開催されます。

時 1985年10月5～6日(土、日)

所 信州大学教育学部(長野市)

一般講演・ポスター発表・シンポジウムのほかにフィルム・セッションとエクスカージョンを予定。シンポジウムのテーマはライチョウの生態と保護、エクスカージョンは10月6日夕方から7日にかけて、野沢温泉に泊り、上信越高原のブナ原生林見学を計画しています。詳細、発表申込みは次号ニュースに。いまから発表などの準備・取組みをお願いします。(中村浩志、〒380 長野市西長野町、信州大学教育学部生物学教室、電話 0262-32-8106 代表)

## ある日の幹事会

竹下 信雄

このところ、学会の幹事会はほぼ毎月1回のペースで開かれている。場所はいつも唐沢幹事が教諭をつとめる都立両国高校である。夕方6時半から9時前まで。国電錦糸町前のラーメン屋か何かで腹ごしらえしたり、パン屋で菓子パンを買い求めたりして散々伍々集る。出席率はなかなかよく、平均70%を超えるだろう。まずお互いのプライベートな用件を済ませてしまう。論文の別刷だの、著者割引きで購入した本だのがいそがしくいきかう。ついで、このひと月の間に各幹事が学会のために立て替えていたお金の精算をする。ほとんどが郵送料だ。

この日3月8日の議題は、1か月足らずのうちに開かれる予定の評議員会に各幹事が準備するものの確認と10月に開催予定の大会(長野で)の検討である。また、日本鳥類目録第6版の編集体制づくりに対する幹事会の態度も改めて討議した。このニュースのことが最も議論をわかせた。印刷費がけっこうかかるので頁数を抑制すべしという意見と、会員からは歓迎されている。退会者が去年はわずか1人だったという報告と、もっともっと載せた〜という意見と。

## 調査・観察の小道具集(2)

## 野帳 (フィールド・ノート)

(まとめ・長谷川 博)

どのような種類の野帳を用いようが、用いまいが、要は研究内容しだい、私自身ここにわざわざ野帳を紹介するのにためらいを感じないわけではない。研究計画に最も適したものを自分の個性にあわせて選定すればよいのだから。それでもなお、こんなことをしようと思ってしまったのは、たいていの人は新しい野帳を使ってみるという冒険をしたがらず、この点については案外”保守的”なのであることを知ったからである。もしそうならば、さまざまな趣味をもった人が使っている野帳の一覧を表にするのも無意義ではなからうと考えた。

1984年9月の鳥学会大会の間、何人かのかたにどんな野帳を使っているか聞きとり調査を行なった。それに私自身の経験をあわせて紹介してみたい(表、写真参照)。

よく使われているのはコクヨのスケッチ・ブック(他にトランシット、レベル・ブックがある)。これは、たいていのポケットに入る手ごろな大きさで、表紙が硬く、背を完全に折りがえすことができ、手にもって書きやすい。野外で移動をくりかえしながら記録するのに適している。難点は80頁しかないのですぐに使いきってしまうこと。その点、ライフのメモランダム・ブックは紙がやや軟かくいが、167頁もあって一冊にたくさんのことを書ける。ただし割高になるが、パイロットの手帳リテコは、各種の罫の入った替リーフをビニール製のカバーにさしこんで使い、同時に2つの替リーフを用いることができる。それをあとで分類して仮とじすれば散逸しない。最も安いのはB6判ノートであるが、表紙が軟かいのでそのままでは使いにくい。表紙にラミネート・コートを貼りつけるとやや

硬くなり、雨や汗にも強くなる。

ここまでの前提は、きまった形の野帳を用いることによって整理をしやすくする、ということであった。しかし、何人かの人は野帳の形にはとらわれず、一般の手帳とかサービスピンの手帳類をつぎつぎに用いている。野帳を用いず、調査の前にデータ記入シートをつくって出かける人、論文草稿をほぼ完成させて具体的なデータを入れるだけを残して野外に出かける人(これができれば理想的)、パソコンに直接出力する人などなど、野帳不要派もいる。

小形の手帳類は持ち運びしやすいという有利さはあるが、きまった場所からあまり動かずに鳥の行動を観察したり、スケッチをしてそこにいろいろのことをメモする場合には、面積が小さくて不便である。このような場合には、B5判のノート類が適している。鳥の行動を観察しながらつぎからつぎと記録をとらねばならない時には、字の大きさや何かにはかまっていられない。とにかく書かなければならない。山岸哲さんは厚手ボール紙を表紙にしたスパイラル・ノート(キャンパス・ノート)をすすめる。背を完全に折り返すこともできる。台紙にクリップで固定し、その横に時計をすえつけて記録をとる。一度にまとめて買いこんでおいて使い、持ち運びには特製の袋を用いる。きまった項目を記録しながら行動観察するには縦罫も入っているB5判統計ノートが便利である。表紙は軟かいので台板にのせて書くとよい(長谷川)。中村登流さんは野帳と”勉強ノート”とを区別せず、B5判中厚手の上質白紙(B4判を半分切ったバラ紙)一本で通す。机上では文献資料のまとめをし、野外では台板上に固定

して用いる。大きくて罫がないのでスケッチに便利だとのこと。それに資料整理に便利だと。これはむしろカードに近い。

ついでだから私が理想と考えている野帳について書こう。電車やバスのなかで新書類を読むことが私の習慣となっているからというわけではないが、前記コクヨのスケッチ・ブックを新書判に拡大したものを望む。4ミリ方眼罫で200頁とし、表紙を厚手ボール紙にビニル・コートを施し、背を完全に折り返せるようにホロー・バック(腔背)にして、し

おり(ひも)のついた手帳。1冊200~300円程度ならば申し分ない。



野帳のいろいろ

品名(コード番号)	表紙(硬さ)	大きさ 横×縦	罫	頁数	価格 (円)
1. コクヨ スケッチ (セY-3)	厚手ボール紙 (硬)	9×16	3ミリ 方眼	80	120
2. ライフ メモランダム (M 289)	ビニルレザー(やや硬)	9×14.8	3.75ミリ 方眼	167	550
3.パイロット手帳					
1) カバー (テコー5)	ビニル (やや硬)	9.8×16	—	—	300
2) 替リーフ (リテコー)	{横罫 (0.6)		5ミリ 27行	48	100
	{統計罫 (13)		5ミリ4欄 25行	48	100
4. B6判ノート (各社)	中厚手紙 (軟)	10.4×14.8	6.1ミリ 20行	76	60
5. B5判スパイラルキャンパスノート	厚手ボール紙 (硬)	18.2×24.9	6ミリ 36行	120	300
6. B5判統計ノート(コクヨノ-4V)	中厚手紙 (軟)	17.9×25.2	6ミリ7欄 35行	80	150
7. B5判 中厚手 上質紙	台板固定	17.9×25.2	白 紙	カード方式	

耐水性ノート

竹下 信雄

雨や露、汗などに汚れて字が見にくくなるのがよくある。昨年あたりから、プラスチック製の“紙”を利用したノートが市販されている。当然、ボールペンや鉛筆、油性ペンなど耐水性の筆記具を使うことになる。書くときの感触は、普通のパルプ紙と変わらず、使いよい。火に対してはパルプ紙と同様に弱い。ライフ社からはアウトドア・スポーツ・メモとアウトドア・スポーツ&ワーク・メモが、タラスブルバ社からフィールド・ノートが販売されている。値段はパルプ紙ノートの倍ぐらい。

(補:水中で調査・観察するダイバーはプラスチック紙を自分の使いやすい大きさに切り、パンチで穴をあけてバインダーやクリップで

とじて使っている。これに複写機(ゼロックス等)で地図や罫を転写して用いることもある。水をかぶる場合には必須。長谷川)

測定器

1. スイス製バネ秤 — ペソラ

茂田 良光

野外で鳥の体重や卵重を測定する場合、銀秤(桿秤)かバネ秤を普通用いる。前者は正確だが扱いにくく、後者は別名、自動手秤というくらい扱いは簡単だが、測定値の正確さでは前者に及ばない。

ところが、スイス製バネ秤、ペソラ(Pesola)は非常に正確で種類も多く(5gから100Kgまで23種類)、同等秤量範囲の銀秤よりはやや安い。その上、バネやクリップ(大・小あり)、マーカーは交換も可能なので半永久的に使用できる。使用するときは写真のように風を避

けて吊るし、風袋ごとマーカーを0点に合わせておけば、短時間に多くの測定ができ大変便利である。

私の知る入手先はイギリスでは、B.T.O.(Beech Grove, Tring, Herts., HP23 5NR U.K.), アメリカではBleitz Wildlife Foundation (5334 Hollywood Boulevard Hollywood, CA 90027 U.S.A.)で、B.T.O.では15種(5g~500g), 後者では50kgまで扱っている。



## 2. 銀秤(ぎんばかり)

長谷川 博

明治初年頃まで、日本では金銀などの貴重品の重さを精密にはかるのに、金秤・銀秤とよばれる桿秤が用いられていた。金秤は目盛5厘以下で5匁(18.75g)までを限度として、ごく小さなものを測るのに用いられ、銀秤では分(0.375g)の目盛があって100匁(375g)までを量った。目盛がメートル法に変わったが同型の桿秤は現在も市販されている。小形・軽量・精確、それに構造が単純なので故障しない。少々雨にぬれても平気である。野外で鳥の体重や卵重を量るのに適している。桿先がふくらんでいて留めがあるものを選び、分銅をつるすひもで適当な大きさの輪を結べば、大切な分銅を紛失することがない。そのようにできない場合には、ごく細い釣り用ナイロン・テグスで分銅のひもと把手とをつな

いでおくとよい。風袋補正ができないこと、いちいち分銅を移動させなければならずたくさん量れない、など欠点もあるが、精確で無故障(把手の緒は少量のアロンアルファをしみこませて固める)なのが魅力的。職人による手作りなので値が張り、1本5,000円以上。度量衡店で買える。私は、50, 200, 1,000gを常に携帯し、それ以上は必要に応じて5kg・10kgのバネ秤を用いている。

## 3. 距離や面積の測定

福田道雄・杉森文夫

センサスロードやフィールドの周囲などの長さを実測する場合、巻尺を使うほかに次のような方法がある。車道があれば、車の走行メーターが使える。ウォキングメジャーあるいはデジタルメジャーと呼ばれるものがある。これは棒の先に小さな輪が1つまたは2つついていて、引いたり押し回して輪を回すと距離が表示される。距離メーター付の万歩計もある。地図上で計る場合は、専用のマップメジャーやキルビメーターがある。

面積は次のようにして簡単に測定することができる。まず知りたい部分の図面を作る(低縮尺率の地図は市町村役場にあるが、拡大コピーでも自作できる)。これをコピーなどで複写した同質の紙を使い、切り取った測定部分と既知の面積部分の重量比によってだせる。また点格子柄(フィルムシート)を使い、測定部分の点数を数え、簡単な計算をすると面積ができる。このほか、外周をキルビメーターを使うようにたどると、面積がデジタル表示されるプランメーターもある。

## Movement

### 近畿地区懇談会—1984年の例会報告—

7年目をむかえた近畿地区懇談会の1984年の活動状況をお知らせします(1982, 83年については本誌14を御参照下さい)。

○第20回例会 1984年3月18日

伊丹市立労働会館 参加14名

大迫義人:セグロセキレイの定着過程と社会組織

須川恒ほか:フランクリンカモメの日本初記

録について。

○第21回例会 1984年7月14日

大阪市立大学文化交流センター 参加12名  
伊藤信義：冬峠におけるコサギの離群行動  
常喜 豊：野外の鳥を用いた擬態の実験

○第22回例会 1984年12月16日

京都東山会館 参加16名  
喜多村竜太郎：鳥類の頸装置の機能形態学  
— 上顎の動く意味について —  
瀬戸 淳：交尾期のケリの観察

## ◎ BIRD N・E・W・S ◎

### 1 長野県北部の河川にコハクチョウが 多数渡来<長野>

長野県は、コハクチョウの渡来地の南限近くにあたり、渡来数は例年きわめて少ない。ところが1984-85年の冬には、千曲川や犀川の各地に数羽から50羽前後の群れが渡来し越冬している。松本市郊外の犀川には1月中旬に50羽ほどのコハクチョウと4羽のオオハクチョウが住みつき、長野市郊外の千曲川には4~5羽のコハクチョウ、佐久盆地の千曲川には10羽前後のコハクチョウが住みついた。

1974年諏訪湖に渡来したコハクチョウが、以後毎年幼鳥や亜成鳥をともなって渡来するようになった(林 俊夫, 1982)ように、これらの個体が今後も継続して渡来し越冬するようになるかどうか、今後が興味深い。

(中村浩志)

### 2 霧島山にソウシチョウ野生化<宮崎>

中国南部からインドにかけて生息し、わが国に古くから飼鳥として輸入されているソウシチョウが野生化している。

霧島山では1979年11月12日に御池野鳥の森で9羽の群を観察以来、毎年、標高400m~1,200mにかけての各所で群の確認がある。ほぼ1年を通して観察され、冬期の群の大きさは10羽前後が多い。5~7月は雄単独でさえずるのが観察される。しかし、まだ繁殖の確認はない。生息場所は照葉樹林の下層部やスダケのやぶの中が多い。

ウグイスなど生息場所の似た鳥への影響が気になるところである。(上谷川剛男)

長瀬健二郎：オーストラリアのいくつかの野鳥(スライド)

近畿地区懇談会は現在会員数59名、鳥学会員獲得のためにも、広く会員外からの参加をみとめています。近畿地方在住の会員の皆様の例会への参加をおまちしています。

連絡先：大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学理学部動物社会研究室(〒558)

日本鳥学会近畿地区懇談会事務局

(上田恵介)

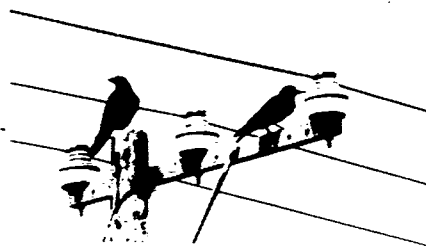
### 3 木に登るヤンバルクイナ<沖縄>

沖縄本島北部に棲息するヤンバルクイナは夜間樹上で休息することが知られているが、どうやって木に登るのか非常に興味を持っていたところ、幸運にも今年の正月に山原を訪れた時、木をよじ登る姿を同行の小沢重雄、榛葉、深川、高田の諸氏と共に観察することができた。時間は午後6時すぎの日没後で、ほとんど観察が不可能となる寸前であった。深紅の丈夫そうな脚を使い、首を長く前に突き出して、垂直に近い幹を一步一步慎重に登る姿は、正に“神秘の鳥”と呼ぶにふさわしいもので、全ての個体が毎日樹上に登るのか、そしてねぐらは一定しているのかなど数々の新たな疑問がわいてきた。(今井光雄)

### 4 '82年春、与那国島でミヤマガラスと ハシブトガラスを見る<沖縄>

旧聞に属するが、沖縄地方でのミヤマガラスの記録は南大東島しかないようなので(写真集沖縄の野鳥, 1983 他)報告する。

1982年4月1日の昼、与那国島租納から東崎へ行く途中のサトウキビ畑の中の電柱上にオサハシブトガラスとともにとまっているのを観察した(写真)。同地には1日から3日まで滞在したがカラス類を見たのはこの1回だけであった。(川内 博)



● 文献管理プログラムができました

昨年の三重大会シンポで若手代表の百瀬氏が鳥関係の文献情報をコンピューターに入力して誰れでも検索できるようにしてはどうかと提案しました。その後、若手研究者で協力して入力しようということになり、今年1月にプログラムとその使用解説書ができました。著者名、科名、種名、キーワードなどで容易に文献リストを検索し、プリントすることができますようになります。今後雑誌ごとに分担を決めて新しい文献から入力してゆき、年内には検索に使えるようにしたいと思っています。協力していただける方、興味をお持ちの

方は御連絡ください。

〒606 左京区北白川追分町 京大・理・動物 百瀬 浩

〒558 住吉区杉本3-3-138

大阪市大・理・生物 藤岡正博

● オナガの繁殖調査

茨城県新治郡桜村周辺でオナガの繁殖調査を行っています。繁殖期(5~9月)(1回1時間位)に協力して下さる方を探しています。営巣樹種、1腹卵数、ひな数などの調査を行います。近くで鳥類の調査に興味のおありの方、御連絡下さい。

〒305 茨城県新治郡桜村天王台

筑波大学生物科学系

竹中 万紀子 Tel. 0298(53)4531

DISCUSSION  
Discussion

大会プログラムの事前送付を

浦野 栄一郎

ここ数年気になっていることがある。古いことは知らないが、仙台大会(1982年)以降、大会前にプログラムが送られて来たことがない。大会前のプログラム送付は、私の所属する他の学会、例えば生態学会や動物行動学会では通例のことである。研究機関に所属する会員を中心に運営されるこれらの学会と、鳥学会とを比べるのは認識不足との意見もあろう。準備段階での人手不足や当事者の苦労は想像できる。しかしプログラムの事前送付は、大会を成功させる重要な要素ではないだろうか?

プログラムが事前に送付されれば、参加申し込みをしていない多くの会員を大会へ誘うと思われる。私自身の経験に照らしてみても、プログラムを見てから参加を決めるというケースが少なくない。大会期間中の半日しか都合のつかない人が、その時間帯の講演にひかれて参加することもあるだろう。大都市(またはその周辺)での開催であれば、その効果は特に大きいと思う。東京大会(1983年)のシンポジウムの盛況は、テーマや時間帯のよさとともに、事前の宣伝効果によるところが大きかったと考えられる。またプログラムの事前送付には、大会に参加できない会員に、学会の動向を逸早く知らせるという別の役割もある。その年度の「鳥」に講演要旨は載っているが、大会後半年も経っていることがしばしばであるし、鳥学ニュースの印象記では研究の動向が伝わってこない。

以上のことはどなたも十分ご存知のはずで、それができないのは人手や資金不足のためだろうが、発送の手間・郵送料の問題は、例えばニュース発行のタイミングを大会に合わせ、それにプログラムを掲載することで、幾分解消できるのではなかろうか。プログラム送付によって当日参加が増えれば、参加費の増収も見込まれるし、それ以上に参加者増によって大会が盛り上がるのが期待できる。

新刊書ニュース

ICBPの専門書

国際鳥類保護会議 (ICBP) は、1982年  
に開催された第18回世界会議のシンポジウム  
・ワークショップでの発表論文と討議をまと  
めて、ICBP Technical Publication と  
して出版することに決め、その編集作業を進  
めてきた。それらが今年あいついで刊行の運  
びになった。ICBPが独自に出版・販売する  
方針をとったのは、重要な情報を含んでいる  
専門書を手ごろな値段に保つため、もし商  
業出版社の手を通じていたなら、30~50%  
増しになっていたと見積っている。しかし、  
そのかわりに、これらの本の宣伝・販売促進  
を加盟団体に協力してもらわなければならない  
とし、本会にもその依頼がきた。

1) Status and Conservation of the  
World's Seabirds (J.P.Croxall, P.G.  
H.Evans & R.W.Schreiber, eds.), ICBP  
Technical Publication No.2., 800pp.

46論文をのせる。船便送料込み 26.90  
ポンド (=約7,600円)。1985年2月刊。世界  
の海鳥の現状と保護についての最新情報をま  
とめている。

2) Conservation of Island Birds (P.J.  
Moore ed.), ICBP Tech. Publ. No.3.,  
276pp.

島嶼鳥類、特に外洋島嶼にすむ陸鳥類の保  
護を取扱う。No.2と姉妹編。16.5ポンド (=約4,700円)。1985年4月刊。

3) Threatened Birds of Africa and  
Related Islands. The ICBP/IUCN Bird  
Red Data Book (N.J.Collar & S.N.  
Stuart), 796pp.

アフリカ大陸と関連島嶼に生息する生存が  
脅かされている177種について詳述。これまで  
(第2版、1979年)、世界の稀少な鳥類が  
一冊にまとめられてきたが、今回から(第3  
版)は地理区ごとにまとめ、詳細な解説をす  
ることになった。24.00ポンド(約6,800円)  
1985年3月刊。

上記3書を本会でとりまとめて注文します。  
購入を希望されるかたは「海鳥、島の鳥、ア  
フリカの鳥、各1冊」などと葉書に書いて、  
事務局あて申込んで下さい。(しめ切り5月  
15日)。注文してから本が届くまで約6週  
間かかります。代金は替為額が決定の後、本  
会の郵便振替口座に払込んでもらいます。早  
くほしい人は直接ICBPあて注文して下さい。  
ICBP, 219c Huntingdon Road, Cambridge  
CB3 0DL, England, U.K.

鳥類写真エイジェンシー

会員のなかには、自分の写真を外国に売り  
たいと思っている人もいるでしょう。学会事  
務局あてにイギリスのエイジェンシーから案  
内が届きました。ごく簡単に紹介します。

会社名 BIRDERS, 46 Westleigh Drive,  
Sonning Common, Reading, Berks., RG4  
9LB United Kingdom

写真家への指針。1) 判形; 35mm判から  
6×6判。2) フィルム; カラー・スライド。  
35mm判ではコダクロームを使用。低感度エ  
クタクロームも場合によっては可。3) 題  
材; 鳥類のみ。営巣、ディスプレイ、特徴的  
な採食法、生活環境など題材となった行動の  
特定の局面をとらえた興味をひくような写真  
を歓迎する。4) 付託; 題材の目録を2部  
そえて送る。初めての場合は返送料を同封す  
る。最低何枚という制限はない。5) ラベ  
ル; スライドの上部に、題材の標準名と学名  
(ラテン語)、撮影月・場所を明記する。撮  
影者名は右側余白に。下部は空けておく(会  
社によるカタログ票づけのため)。6) 手  
数料; 40%(たいていの野生生物写真エイ  
ジェンシーは50%の手数料をとっている)。  
7) 契約; 写真受入の後、写真家と会社との  
間で、著作権保有や商取引条件などについて  
協約を結び署名する。

以上2件の詳細を知りたいかたは直接会社  
に問合せるか、長谷川博まで連絡を。(〒274  
船橋市三山2-2-1 東邦大・理・海洋生物  
TEL0474-72-1141 内線353)

## 新 著 紹 介

●日本・東南アジア 地域  
の鳥類の渡り研究に貢  
献したマクルーア氏の  
新著が出版された。

McClure, Elliot 1984. Bird Banding. 10  
+342pp. Boxwood Press (183 Ocean View  
Blvd, Pacific Grove, California 93950  
U.S.A.) 価格 15 ドル(約4,000円) 足環標  
識作業に必要な具体的情報が数多く記述され  
ている。

●山階鳥類研究所創立 50 周年記念出版、「山

階鳥類研究所 50年のあゆみ」12+228 頁。  
1984年3月, 山階鳥類研究所。祝賀編と資  
料編からなり, 研究所の活動史を記録し, 将  
来を展望している。価格, 購入方法は直接研  
究所に連絡を。

●会員の中川暁之介氏が「屋久島並周辺海域  
の鳥類」(20 pp.) を出版された。屋久島一  
帯のリストで, 送料とも 870 円(切手可)

<申込先> 〒569 高槻市松が丘 2-22-26

中川 暁之介宛

## '83 年度 鳥学会大会シンポジウムの資料

三重大会でのシンポジウム「これからの日本の鳥学」の資料として, 大会世話人会(伊藤信  
義, 上田恵介, 江崎保男, 坂根隆治, 須川恒, 樋口行雄, 藤岡正博, 百瀬浩, 山岸哲)では,  
学会員 200 名を名簿から無作為抽出しアンケートを行なうとともに, 戦後の日本人による鳥  
類学関係の論文の推移に関する調査を行なった。以下その結果を報告したい。

1. 鳥学会会員に対するアンケートの結果 (200 通のうち 182 人へ届き, 回収 96 通)

質問・1) 現在鳥の研究によって生計をたてていますか? → たてている(10人) たててい  
ない(86人)。すなわち職業研究者は 10.4% にすぎない。

質問・2) 現在テーマを決めて観察・研究をしていますか? → テーマを決めている(58人)  
= 60.4%。

質問・3) 1 週間に何時間位研究(室内・室外)に費やしていますか? → 1 時間未満(35人)  
7 時間まで(40人) 14 時間まで(8人) 14 時間以上(13人)

質問・4) 最近 10 年の間に学会大会で発表しましたか? → 1 回でもしたことがある(34名)。  
ただし鳥学会大会では 9 人。最近 10 年間の総大会講演数(解答者全員の合計)は鳥  
学会大会が 46 件, 他学会の大会が 90 件。

質問・5) 最近 10 年の間に論文を発表しましたか? → 論文を書いた(49人)。ただしこの  
中には学術雑誌の他に研究所や博物館の報告書なども含まれ「鳥」に発表した人は 10  
人。また, 最近 10 年間の総論文数(解答者全員の合計)を見ると, 「鳥」(20 篇)  
に対し, 他の学会誌・報告書(194 篇)への投稿が多いことがわかった。

質問・6) 論文を一度も発表しなかった人(47名)の理由は?(複数解答可) → (多い順)  
書くタネがない・データ不足(72%) 英文要約や図表の書き方がわからない(約 19  
%) 論文の書き方がわからない(約 15%) 書く必要や意義を認めない・投稿したが  
添削されてやめた(各 4.3%) これ以外に本業の方が忙しく, 時間がとれないなどの  
他の理由を挙げた方が 24 人(51%) いた。

2. 戦後の日本人による鳥関係の論文の動向(1950 年以降に出版されたもの)

戦後の内外の学会誌に, どの研究分野に何篇位の論文が投稿されているかを, 年度を追って  
調べた。項目は英文・和文の別, 研究分野, 著者の所属および学会員か否か。

<調べた雑誌のリスト> 日本生態学会誌, 個体群生態学会誌, 生理生態, 応用動物昆虫学会  
誌, 鳥(74・82・84 号欠), 山階鳥研報, Auk, Ibis, Animal Behaviour, Emu,  
動物学雑誌, 動物生理学会誌, Journal of Ethology, 国立科学博物館研究報告, 国立科学  
博物館専報, Journal of Morphology, Behaviour, Wilson Bulletin, Journal of



図1 ◆ 英文/和文で書かれた論文数の年ごとの変化 ◆

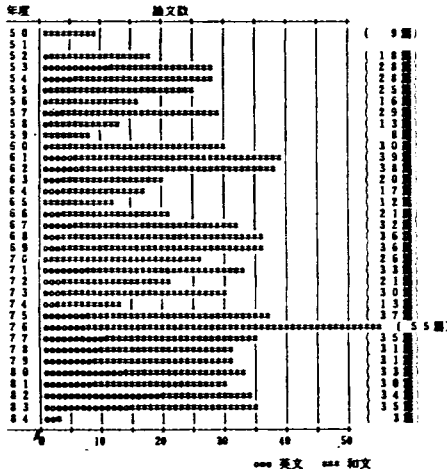


図2 ◆ 分野別に見た論文の数 ◆

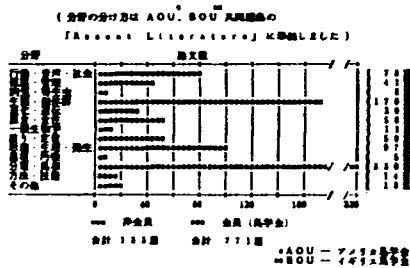
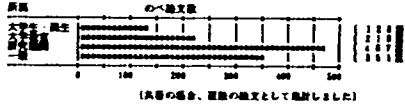


図3 ◆ 年度別・分野別にみた論文の数 ◆

年度	分野									
	鳥学	動物学	植物学	生理学	生化学	遺伝学	生態学	地質学	気象学	天文学
50-54	11	6	0	1	1	1	1	1	1	1
55-59	4	9	2	1	1	1	1	1	1	1
60-64	7	3	1	1	1	1	1	1	1	1
65-69	5	4	1	1	1	1	1	1	1	1
70-74	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
75-79	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
80-84	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

図4 ◆ 著者の所属別にみた論文の数 ◆



### 海外鳥学論文のコピー申込みについて

前号の鳥学ニュースでお知らせしたように、本会では会員の依頼に対し、本会所蔵の海外鳥学雑誌のコピーサービスを行なっていますが、申し込みと代金支払い方法を次のように改めます。(1)申込者は、該当論文の「著者名・発行年・表題・雑誌名・巻号頁」をハガキに書き、本会事務所に申し込む。(2)本会はコピーと一緒に振替用紙を送付します。代金は振替で送金下さい。なお、料金はコピー1枚につき25円(30円を25円に改定)と送料実費ですが、本会の請求にしたがって、後払いをお願いします。また、申し込みの前に、鳥学ニュースNo.15を参照し、コピーする論文所載の雑誌が本会にあるかどうかを確かめて下さい。  
(森岡弘之)

## Meeting

鳥学会例会 1984年5月26日(土)

14~16時 上野動物園ホール

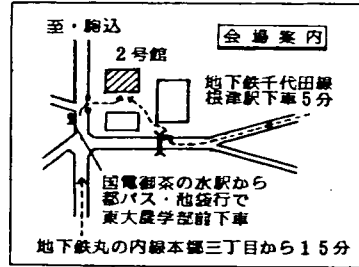
<講演>ハンボソミズナギドリの光と影—  
繁殖地タスマニアと越冬地太平洋ベーリング  
海を訪ねて: 岡 奈理子氏(山階鳥類研究所)

1975~76年,日本の太平洋岸にハンボソミズナギドリの死体が多数打ちあげられた。これをきっかけに、岡さんを含めた山階鳥類研究所のグループは、いくつかの観点からハンボソミズナギドリの研究に着手した。大量死の原因は何か、死んでいるのはどんな個体か、といった疑問を解くために調査範囲は太平洋

全域へと広がった。死体の頭骨を検査したところ大部分が若鳥だとわかった。自動車輪出船に同乗して太平洋を何往復もした結果、渡りルートの概要もつかめてきた。岡さん自身、オーストラリアの繁殖地へ行って現地の状況を見てこられた。食用などのために今でも毎年数十万羽が捕殺されているといった陰の部分、地道な調査が続けられ、サンクチュアリもできているといった光の部分など紹介され、将来はオーストラリアとの協同研究もすすめたいとのことであった。どんなデータが必要か、得られたデータをどう評価するかなど、会場での討論に熱が入り、参加者も多く盛会だった。  
(石田 健)

## 例会のお知らせ

1985年5月18日(土)午後2時開演～4時ごろまで  
 講演：ムクドリのおねぐらとその役割  
 神崎伸夫氏(筑波鳥類研究会)  
 紹介：新しい山階鳥類研究所の素顔  
 (山階鳥類研究所)  
 会場：東京大学農学部2号館 教室  
 (教室番号は当日入口に表示します)



※ やむをえず会場や講演内容の変更や中止をする場合があります。

(5月16～18日)の間、テレホンサービスしています → ☎484-62-7141

### ◆ 評議員・監事選挙結果について ◆

1985 - 86年度の評議員・監事選挙は、1984年12月22日にしめ切れ、24日に開票された。

1) 評議員 投票総数 114票, 有効票 114票。当選者は次のとおり(A-オ順) ;

阿部学 69, 柿沢亮三 42, 唐沢孝一 67, 川内博 35, 黒田長久 68, 柴田敏隆 42, 竹下信雄 40, 中村司 53, 中村登流 74, 長谷川博 79, 樋口広芳 91, 藤巻裕蔵 57, 森岡弘之 76, 山岸哲 76, 吉井正 55。次点者中村浩志 35 (川内氏と同点, 若年者当選の会則による)。以下羽田健三 34, 浦本昌紀 30の順。その他 127名(省略)。

2) 会計監事 投票総数 111票, 有効票 107票 当選者はつぎの2名

千羽晋示 32, 森岡照明 28。次点者吉井正 14, その他 59名(省略)。

以上報告します。

(庶務幹事 唐沢孝一)

《年会費を納入して下さい》

<前15号の訂正とおわび>

郵便振替用紙を同封しました。1985年度  
 会費の未納の方は至急お願いします。

・ p.5 山階鳥研の郵便番号と電話番号が違  
 っていました。正しくは 〒270-11  
 電話0471-82-1101～8 です。

会員 4,000円 維持会員 10,000円

《鳥33巻2/3号について》

・ p.7 ヤナギムシクイはキタヤナギムシク  
 イ *P. trochilus* の誤りです。

先般配布した「鳥」33巻2/3号の一部に  
 製本ミスによる欠陥品が混入していた疑いが  
 あります。取替えますのでご返送下さい。

関係者および読者の方にご迷惑をおかけし  
 申しわけありませんでした。 (編集部)

ニュース編集部 〒112東京都文京区大塚5-40-10 日本大学豊山高校 川内 博 宛

### 編集後記

好事魔多しとか。やっとバラエティに富んだ、利用価値のあるニュースができたと思ってい  
 たら「内容に誤りあり」の電話にシュン！ 今号は完璧であることを祈りつつ執筆者に感謝し  
 ます。ついでに次号(7月発行)の企画は、きっと役にたちますぞと予告しておきます。(川内)

## 鳥学ニュース No. 16

1985年4月1日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160)東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文芸社印刷